



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	自分の考えをもち、読みを深めることのできる児童の育成：対話活動を通して、わかり合う喜びを実感できる授業をめざして(fulltext)
Author(s)	柳原,典子
Citation	東京学芸大学教職大学院年報, 1: 37-48
Issue Date	2012-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/132034
Publisher	東京学芸大学教職大学院
Rights	

自分の考えをもち、読みを深めることのできる児童の育成 —対話活動を通して、わかり合う喜びを実感できる授業をめざして—

柳原 典子（東京都江戸川区立一之江小学校）

はじめに

本実践研究は、韓国教育課程評価院主催の「日本の学業不振学生指導優秀事例に関する協議会（2011）」にて学力不振児について日本では、校内研究及び授業レベルにおいてどのような取組を行っているのかという要請に対して、事例を報告した経緯をもとにまとめたものである。東京都品川区立杜松小学校における2008年の校内研究に基づき、筆者が授業研究を行った『小学校6年生 国語科 説明文「平和のとりでを築く」』の授業における学習指導法の工夫について述べている。授業研究を通して、学習指導法を工夫するための5観点及び主体的な学びを育む学習指導法のデザイン枠組みを見出している。

1. 研究主題設定の理由

今、子どもたちに必要な学びとは、「他者とのかかわりを通して創造する喜びや自分や他者のよさに気づくこと」である。それは、「人・こと・もの」との出会いから手ごたえを感じ、友達や教師との心の絆から生まれる言葉でつながっていく過程を通して、新たな見方・考え方が生まれることを実感することである。

2007年、東京都品川区立杜松小学校では、論理的思力（読解力）と豊かな表現力（感性・情緒）を育てるために実践的活動を通して研究を進めた。研究を通して多くの成果がみられたが、読解力や表現力を高める上で今日的な課題である「知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力」や「自分の考えをもち、言葉を通して伝え合い、互いに理解し合う能力」等の不足が本校の児童にも顕著であった。

2007年の研究より明らかになった、子どもたちの課題は次の2点である。

- 課題に対して主体的に働きかけることができるようにすること
- 読みの方法を知り、自分の力で読み、他者との対話の中で読みを深められるようにすること

これらの課題の解決をはかるためには、国語科のねらいである「伝え合う力」を言葉による相手との双方向のやりとり（対話）としてとらえ、「読むこと」における対話活動に視点をおいた研究を行う必要があると考えた。対話活動の価値については以下のようにとらえている。自分の読みや考えを他者に言葉を通して伝え合うことによって、互いの考えをわかり合う喜びを味わい、主体的に学ぶ意欲を育てることができる。対話を通して、他者の読みや考えと比較することにより、新しい気づきが生まれ、自分の読みや考えをより深めることができる。

以上のような理由から2008年の校内研究における研究主題を「自分の考えをもち、読みを深めることのできる児童の育成」と設定した。また、上記に挙げたこれら2つの課題は、学力不振の子どもたちにとって共通的にみられる克服すべき課題でもある。その点から、この実践研究の意味を探ってもみたい。

2. 本研究における学力不振児への効果的な学習指導法に対するとらえ方

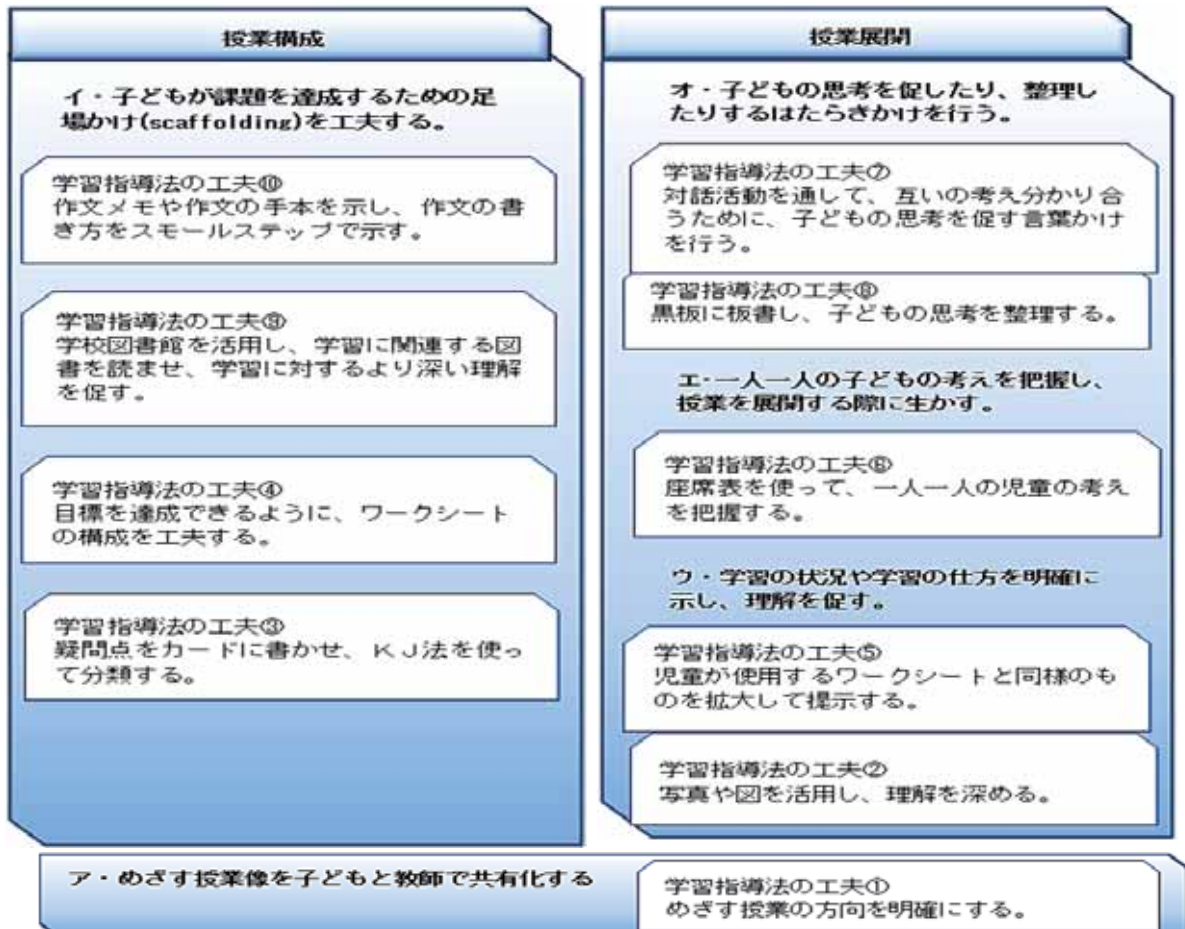
本研究では、学びに立ち向うすべての子どもたちが、自分の考えをもち、伝え合うことによって、他者と分かり合う喜びや新たな気づきが生まれることを実感できる授業を展開することをめざしている。これは、「子どもたちは、本来わかるようになりたいという思いをもっている主体的な存在である」という子ども観に基づいている。したがって、学力不振児のみを対象にした学習指導法の工夫を提案することはしていないが、学習指導法を工夫する上では、共通しうる部分が多いと考えている。

授業研究を通して活用した 10 点の学習指導法を分類・整理し、学習指導法を工夫する観点 5 点を（秋田, 2007）の先行研究をもとに以下に見出した。

学習指導法を工夫するための 5 観点	(表 1)
ア・めざす授業像を子どもと教師で共有化する。	
イ・子どもが課題を達成するための足場かけ (scaffolding) を工夫する。	
ウ・学習の状況や学習の仕方を明確に示し、理解を促す。	
エ・一人一人の子どもの考えを把握し、授業を展開する際に生かす。	
オ・子どもの思考を促したり、整理したりするはたらきかけを行う。	

さらに、(表 1) における観点及び学習指導法の具体例 10 点を（鶴田, 2010）の先行研究をもとに構成し、以下に表す枠組みを見出した。この枠組みは、(表 1) における観点アを基盤として授業構成と授業展開を往還しながら、子どもが自ら課題を達成できるようなものである。

主体的な学びを育む学習指導法のデザイン枠組み



3. 授業研究及び学習指導法の工夫

(1) 単元名及び研究対象学年

【単元名】	自分にとって「平和のとりでを築く」ことの意味を考え、発信しよう
【研究対象学年】	小学校6年生
【使用教材】	国語科 説明文 「平和のとりでを築く」

(2) 教材の内容

「平和のとりでを築く」は、戦争で広島に原子爆弾が投下され、傷だらけになった「物産陳列館」が多くの人々の平和を願う心によって、世界遺産「原爆ドーム」となった経緯を述べた説明文である。本教材は、「話題提示—説明（原爆ドームがたどった歴史・世界遺産への道のり）—まとめ」というわかりやすい文章構成になっている。原爆ドームの話題から平和を願う作者の思いを切実に受け止め、「平和」とは何かということについて自分なりに考えさせることができる作品である。

(3) 学習を通して身につけさせたい読みの力

- 原爆ドームに対する広島の人々や作者の思いについて自分と重ね合わせながら読む。
- 「平和のとりでを築く」にこめられた作者の思いについて考える。
- 自分にとって「平和のとりでを築くこと」とはどのようなことなのかを考え、発信する。

(4) 単元計画及び指導法の工夫

単元の展開の仕方及び指導法の工夫を以下の表に示す。

時数	単元計画	学習指導法の工夫
授業の前段階の指導	授業は、「子どもと教師がともに創り上げるものである」という考えのもと、めざす授業を共有化する。	【学習指導法の工夫①】 めざす授業の方向を明確にする。
第1時	題名から疑問に思ったことを考え、学習の計画を立てよう。	【学習指導法の工夫②】 写真や図を活用し理解を深める。
第2時	疑問に思ったことやこれから学習していきたいことについて話し合おう。	【学習指導法の工夫③】 疑問点をカードに書かせ、K J法を使って分類する。
第3時	文章全体を3つに分け、分け方を話し合うことを通して文章構成をとらえよう。	
第4時	原爆ドームのたどった年月と世界遺産への道のりを年表にまとめ、思ったことを話し合おう。	【学習指導法の工夫④】 課題を達成できるようにワークシートの構成を工夫する。 【学習指導法の工夫⑤】 子どもが使用するワークシートと同様のものを拡大して提示する。

第5時	筆者の伝えたいことは何かについて、今の段階で自分の考えをまとめよう。	
第6時	「人の心の中に平和のとりでを築く」この言葉に込められた作者の願いについて自分の考えをまとめよう。	<p>【学習指導法の工夫⑥】</p> <p>座席表を使って、一人一人の子どもの考えを把握する。</p> <p>学習不振児の座席表記録の蓄積を通して変容がみられた事例。</p> <p>【学習指導法の工夫⑦】</p> <p>対話活動を通して、互いの考えをわかり合うために子どもの思考を促す言葉かけを行う。</p> <p>【学習指導法の工夫⑧】</p> <p>黒板に板書をし、子どもの思考を整理する。</p>
第7時	「平和」をテーマに書かれた図書を読み、「平和」に対する自分の考えをより広げよう。	<p>【学習指導法の工夫⑨】</p> <p>学校図書館を活用し、学習に関連する図書を読ませ、学習に対するより深い理解を促す。</p>
第8時	自分にとって「平和のとりでを築く」こととはどのようなことなのか、発信したい考えをもとう。	
第9時～ 第11時	作文メモを使って、自分の主張と話の展開を整理しよう。	<p>【学習指導法の工夫⑩】</p> <p>作文メモや作文の手本を示し、作文の書き方をスモールステップで示す。</p>
第12時	自分にとって「平和のとりでを築く」ことの意味を考え、発信しよう。	

(5) 学習指導法の工夫に視点をおいた授業展開

学習指導法の工夫① めざす授業の方向性を明確にする。

校内研究におけるめざす授業像を教師間で吟味・検討をし、「授業は、子どもと教師が協働し、ともに創り上げるものである」という考え方に至った。めざす授業像を子どもたちと共有化するために、自分のクラスでは、どのような授業をつくっていききたいのかというテーマで話し合うことを行った。


話し合いの結果から、子どもたちは、次の授業をめざしていることが明らかになった。1つ目は、言葉のやりとりを通して自分の考えを伝え、受け止めてもらえることである。2つ目は、友だちの意見を取り入れることによって新たな考えが生まれることを実感することである。子どもたちがめざしている授業は、研究の目的である「対話活動を通して、わかり合う喜びを実感できる授業」とまさに方向性が一致した。

このように、子どもの学びに立ち向う姿勢を教師が理解し、めざす授業の方向性を共有化し明確にすることが、自ら学ぶ意欲を高める基盤となる。

第1時 題名から疑問に思ったことを考え、学習の計画を立てよう。

平和のとりでを築く (第一時)

写真を見て、気づいたことや疑問を見つけよう。



広島にある

鉄骨やレンガが落ちている

原子爆弾

原爆ドーム

これから学習していきたいこと

○なぜ、原爆ドームという名前がついたのか？

○なぜ、原爆ドームは今も残っているのか？

○戦争で原子爆弾が落とされた建物なのに、なぜ、世界遺産になったのか？

図1

学習指導法の工夫② 写真や図を活用し、理解を深める

子どもたちが、初めて本単元における教材と出会う場面である。魅力ある教材との出会いは、疑問や共感などの思いが自らを突き動かし、自ら対象に主体的に働きかけ、追究していくことができる契機となる。子どもと教材が出会う場面を工夫し、原爆ドームの写真と提示した(図1)。この写真は、筆者自らが広島に足を運び、原爆ドームと向き合っ撮影したものである。「平和とは何か?」「原爆ドームを世界遺産として残したいと願う広島の人々の思いとは何か?」。この本質的な問いを前に、教師である筆者自身がまず、原爆ドームと対峙すべきであるという思いをもった。そのために、広島に向かったのである。子どもたちは、原爆ドームの写真とじっくり向き合うことを通して、「原爆ドームがなぜ、今も残っているのか」「なぜ、世界遺産になったのか」という学習の本質を貫く問いをもった。

第2時 疑問に思ったことやこれから学習していきたいことについて話し合おう。

平和のとりでを築く (第二時)

疑問に思ったことやこれから学習していきたいことを話し合おう。

広島市にどうして原爆が落とされたのか?

保存反対論者の人たちは、どうして原爆ドームを一刻も早く取り壊したいというのか?

原爆ドームを永久保存しようという動きについてくわしく知りたい。

原爆ドームを永久保存するきっかけとなった一少女の日記を読んで広島の人たちはどんな気持ちになったのか?

戦争は、なぜ人の心の中で生まれるのか?

作者は、なぜ、「人の心の中に平和のとりでを築く」必要があると言っているのか?

図2

学習指導法の工夫③ 疑問点をカードに書かせ、KJ法を使って分類する。

教材に主体的に働きかけ、問題意識をもつことができるようにするために、教科書にサイドラインを引き、疑問点を書き込みながら読むことを行った。

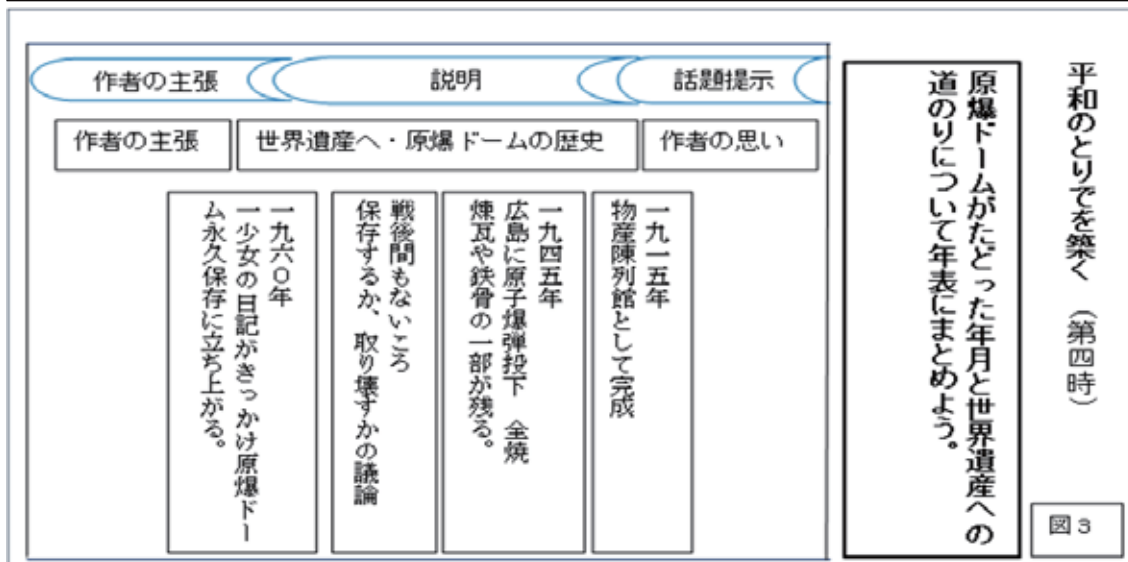
その後、叙述を根拠にして疑問に思う点や今後クラス全体で学習していきたいことを一つ選び、カードに書かせた。カードをKJ法により分類することをを行った(図2)。KJ法とは、文化人類学者川喜田二郎がデータをまとめるために考案した手法である。データをカードに記入し、カードをグループごとにまとめ、断片的なデータを統合していく。共同作業によって創造的に問題解決を図っていくことに効果的な方法であり、企業研修や学校教育等様々な場面で用いられている。

KJ法によって子どもたちの考えを分類することには、次の3点のよさがある。

- ①子ども一人一人の考えをすべて大事にしていく過程を通して、学習に対する参加意識を高めることができる。
- ②似た意見がある場合は、一つにまとめていくことによって、自分の考えと友だちの考えの共通点を見出すことができる。
- ③クラス全体でこれから学習していきたいことについて、見通しをもつことができる。

子どもの考えを分類する活動を通して、「人の心の中に平和のとりでを築く」という言葉から作者が伝えたいことの意味とは何かという学習の本質を貫く意見が出された。これを学習の中心課題として位置づけた。

第4時 原爆ドームのたどった年月と世界遺産への道のりを年表にまとめ、思ったことを話し合おう。



学習指導法の工夫④ 課題を達成できるように、ワークシートの構成を工夫する。

第4時の課題は、「原爆ドームがたどった年月と世界遺産への道のりについて読み取る」である。文章全体の構成(話題提示-説明-作者の主張)と原爆ドームが、被爆から世界遺産登録までにたどってきた歴史が俯瞰できるように「年表形式」のワークシートを作

成した（図3）。年表にまとめる活動には次の3点のよさがある。

- ①年表作りは、社会科の歴史の学習とも関連があり、楽しみながら活動できる要素がある。そのため、習熟の度合いに関係なく、どの子どもも意欲をもって取り組むことができる。
- ②原爆ドームの歴史について「年代」「主なできごと」などが、文章中に明確に記載されている。そのため、どんな子どもも文章から重要な情報を取り出すことができる。
- ③文章から重要な情報を取り出し、キーワードやキーセンテンスをつかむ力をつけることができる。

学習指導法の工夫⑤ 子どもが使用するワークシートと同様のものを拡大して提示する。

子どもたちが使用するワークシートと同様のものを拡大して提示すること（図3）は、次の3点のよさがある。

- ①「何を」「どこに」「どのように書いたらよいのか」といった学習の仕方を確実に理解させることができる。
- ②子どもたちにとって学習の状況を理解しやすいため、習熟度の比較的低い子どもにとっても、より確実な理解を促すことができる。
- ③学習事項を紙ベースで保存しておくことができる。そのため、次時の学習の際に、前回の学習事項を補助黒板に掲示しておき、既習事項をふり返らせることができる。

第6時 「人の心の中に平和のとりでを築く」この言葉に込められた作者の願いについて自分の考えをまとめよう。

学習指導法の工夫⑥ 座席表を使って、一人一人の子どもの考えを把握する。

座席表とは、学級の子どもの人数分の座席を表した教室配置図のようなシートに「子どもの考えや思い」「教師の期待や願い」「授業における手だてや対応」等を記入し、授業における一人一人の子どもの記録を蓄積していくものである（表2）。座席表には、ある時点における学級一人一人の子どもの、一度立ち止まって、とらえ直していく機能がある。学級の全員分を書きこむ作業を通して、一人一人のとらえを整理し、子ども理解を深めようとするものである。

座席表を活用し、記録することは、次の4点のよさがある。

- ①学級全体の子どもの姿を一枚の座席表に表すことにより、それまで気づかなかった子どもの姿や他の子どもとのつながりを見出すことができる。
- ②子どもの発言や行動の事実とともに、その子の発言や行動に対する背景について考察することによって、その子へのとらえを広げたり、深めたりしていくことができる。
- ③座席表の記録の蓄積によって子どもの考えをより深く解釈し、手立てを見つめ直し、次の指導に生かしていく。このサイクルを繰り返していくことによって、その子の新たなよさや変容をとらえることができ、子ども理解に基づいた授業を展開することができる。
- ④子どもをとらえ、座席表に記録して考察してみようとする前向きな姿勢が、教師の子どもを見取る感性を磨くことにつながる。

<p>国語 6年「平和のとりでを築く」作者の主張について (2008/10/31) 「作者が原爆ドームを通して、わたしたちに伝えたいことは何か？」</p>	<p>①子どもの考え ②教師の願い</p>
<p>K・H (観察対象児童) ①作者は、原爆が落とされて多くの人 がなくなって、その悲しみを忘れない ように世界遺産にしようと思ったんだ と思う。この悲しみをまだ、知らない 人に知ってほしいという気持ちで言っ ている。②自分の考えがもてるよう になった。みんなの前で発表できるよう 支援する。</p>	<p>O・U ①原爆ドームの年表を書くまでは、詳し く知らなくていいやと思っていただ れど、やっていくうちにどんどん楽しくな ってきて将来、原爆ドームを見に行きた くなりました。 戦争は、人の心の中で生まれるもので あるからそれは、人の心の中でなくさな ければならない。それには、自分達人間 は、やさしい心をもたなければならない。 ②年表形式でまとめることで内容理解が 深まった。本児が歴史好きであることか ら、原爆ドームの歴史に自分の思いを重 ねている。作者の主張を自分の言葉で再 構成している。本児の考える「やさしさ」 とは何かを深めさせたい。</p>
<p>M・U ①原爆ドームを見て、原爆ドームのこ とを覚えてもらいたい。原爆は、外傷 だけでなく、体の中からじわじわとむ しばんでいくのがこわいところだと思 います。体験したことも本物も見たこ ともないのにこの気持ちがすごく伝わ ってきました。②原爆ドームを見るこ とで戦争を戒める気持ちをもってほし いという作者の主張をとらえている。 O・Uと意見交換させたい。</p>	<p>座席表の一部抜粋 イニシャルは児童名 (表2)</p>

学習指導法の工夫⑥ 学習不振児の座席表記録の蓄積を通して変容がみられた事例

【観察対象児童】 K・H (表2 座席表参照)

【日常における学習態度及び指導の方針】

5年生の時点では、集中力が途切れると、奇声を挙げる等学習への参加意欲が低下していた。学習面で本児が苦手とすることは、主に以下の2点である。「自分の思いや考えを相手にわかりやすく伝えること」「文章を読み、作者の主張や登場人物の心情について内容を理解し、自分の考えを書くこと」である。また、本児の情報を理解する傾向は、視覚から情報を処理することが理解しやすい。そのため、指導の方針を「写真や図などを効果的に活用し、学習の状況や学習の仕方を明確にすること」とした。指導の継続によって、学習への参加に変化が見られた。

6年生の時点では、学習へ参加する意欲が少しずつ高まってきた。集中力が途切れた時は、教師に申し出てトイレに5分程度行き、気持ちを落ち着けてから再び学習に参加をするようになった。

【本単元の学習における足場かけの工夫及び学習を通しての変容】

本児の興味・関心や考え方の傾向をとらえた指導を行うことが、本児の学習への参加を促すことにつながると考えた。本児は、世界遺産などの歴史的建造物や歴史上の人物に興味がある。宿泊体験学習で訪れた日光東照宮では、「見ざる・言わざる・聞かざる」の三体の猿の彫刻に大変興味をもった。また、一生懸命努力している人の気持ちを自分なり感じ取ろうというやさしい一面をもっている。

このような本児の特徴をとらえ、本単元の学習における足場かけを以下の2点工夫した。「原爆ドームのたどった歴史を年表にまとめる活動を通して、文章の内容を理解させる。」「原爆ドームを世界遺産に登録し、後世に残そうとした広島の人々の気持ちを考えさせる。」

本児は、年表にまとめる活動を通して、原爆ドームをめぐる人々の思いに着目した考えをもった。原爆ドームが被爆前に多くの人々に愛されていた建物であったことや、保存するのか取り壊すのかの議論が続いたこと等、単なる歴史的建造物を超えて人々の思いがたくさんつまっていることに着目したのである。

また、作者の主張についても人の思いに着目した考えをもった（表2 座席表参照）。本児の考えを筆者は、以下のように解釈した。「原爆を落とされて多くの人々が亡くなった悲しみについて原爆ドームを見た人が、見るという行為を通して、この悲しみを知り、心に刻んでほしい。」本児の考えは、文章表現は稚拙であるが、作者の主張を的確にとらえている。本児の考えを生かし、他の子どもたちの意見と交流させることを行った。それによって、自分の意見を伝える喜びと他者に受け止めてもらえた喜びを味わうことができた。この姿は、まさに本研究のめざすものである。

以上の事例ように、子どもの興味・関心や考え方の傾向をとらえた足場かけの工夫や座席表の記録の蓄積によって子どもの考えをより深く解釈し、手立てを見つめ直し、次の指導に生かしていくことを通して、学習内容の確実な理解と学習意欲を高めることができた。

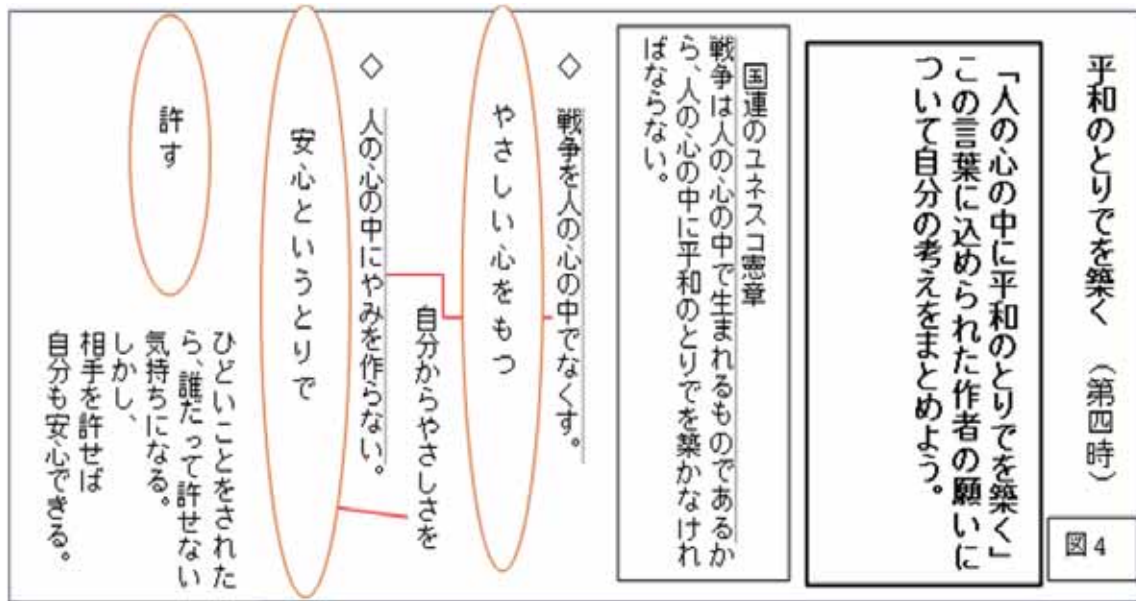
学習指導法の工夫⑦ 対話活動を通して、互いの考えを分かり合うために、子どもの思考を促す言葉かけを行う。

第6時の学習課題は、『「人の心の中に平和のとりでを築く』この言葉に込められた作者の願いについて自分の考えをまとめよう。』である。作者の主張について、自分はどのように考えるのかということ話し合った。話し合いでは、大きく3つの意見がだされた。

- ・ 戦争は、人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中でなくさなければならぬ。そのためには、「やさしい心」をもつことである。
- ・ 人の心の中にやみを作らない。そのためには、「安心というとりで」をつくる必要がある。
- ・ 人の心の中に戦争をしようとする気持ちをなくすためには、「許すこと」が必要である。

子どもの意見のキーワードを板書し、「やさしい心」「安心というとりで」「許すこと」とは、どのような思いから生まれてきたことなのかを問いかけた。これは、子どもの思いや考えの根拠を明確にさせることによって、自分の考えを明確にさせるためである。これによって、自分の考えがまとまり、どこまで整理できているのか気づくことができた。また、他の子どもたちにとっても、相手の意見が理解しやすくなり、お互いの考えを理解し合おうとする意欲を高めることにつながった。

学習指導法の工夫⑧ 黒板に板書をし、子どもの思考を整理する。



学習課題について討論を行う際、子どもの意見を黒板に板書しながら、授業を進行した(図4)。板書を行うことのよさは次の2点である。

- ①学習過程を明らかにし、子どもの理解を促すことができる。
- ②子どもの意見を板書することによって、話し合いの方向性を明確にし、子どもの思考を整理することができる。

また、板書する内容や記入の仕方を以下のように工夫した。

【内容】学習課題・写真や表などの資料・子どもの意見(疑問点や対立する点等)・解決の方向性を示す発問や資料の明示・授業を通して理解させたい内容のポイント等である。

【まとめ方】授業の展開に合わせて順序立てて書く。要点だけを簡条書きにする。子どもの意見の共通点や対立する点を線で結んだり、キーワードは色チョークを使って図式化したりして、構造的にまとめる。

第7時 「平和」をテーマに書かれた図書を読み、「平和」に対する自分の考えをより広げよう。

学習指導法の工夫⑨

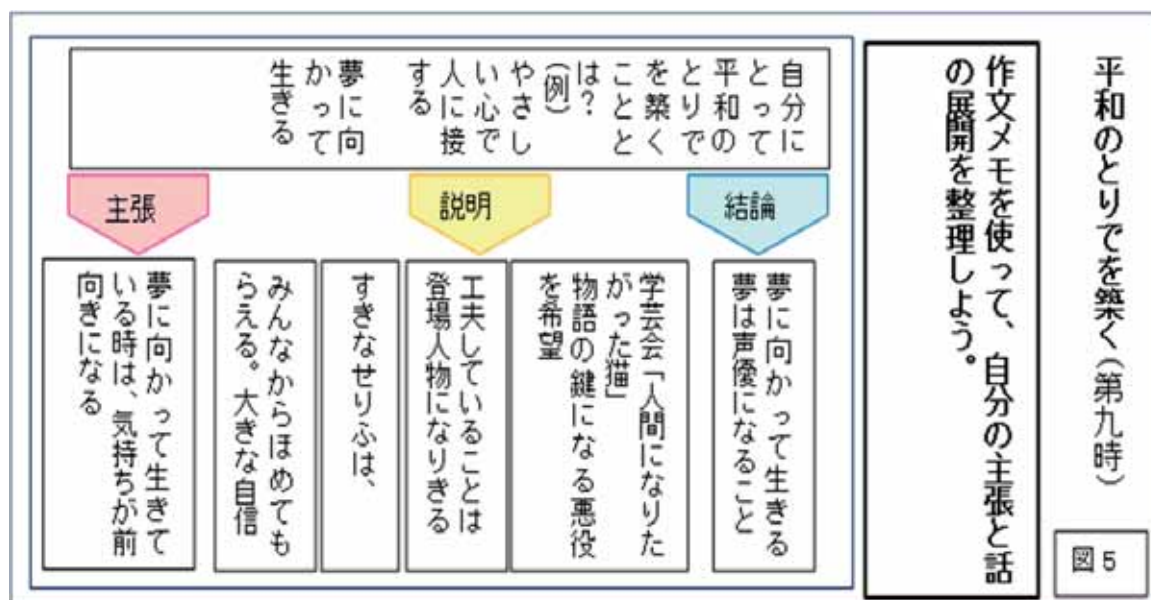
学校図書館を活用し、学習に関連する図書を読ませ、学習に対するより深い理解を促す。

学校司書(図書館司書の資格をもち、学校図書館に配属される司書)との連携を図り、学習に関連する図書を収集した。収集した図書は、約50冊程度である。読書リストを作成し、一人5冊読むことを目標に取り組んだ。教育課程に位置づけられた週3回朝15分の読書の時間や授業の時間等を活用して読書を行った。教師による本の読み聞かせや学校司書による本の紹介を通して、戦争や原爆に関する図書に関心をもって読み進めていった。

第9～11時 作文メモを使って、自分の主張と話の展開を整理しよう。

学習指導法の工夫⑩

作文メモや作文の手本を示し、作文の書き方をスモールステップで示す。



学習のまとめとして、自分にとって「平和のとりでを築くこと」の意味を考え、自分の主張を書く活動を行った。教材文「平和のとりでを築く」の文章構成を生かし、話の展開を「結論・作者の思い」「説明」「作者の主張」という形でまとめていった。学級の児童の約70%程度が、自分の考えを作文にまとめる活動を苦手としていた。その理由の最たるものは、話の展開をどのように構成したらよいかかわからないことである。そこで、作文メモや作文の手本を示し、作文の書き方をスモールステップで示した(図5)。作文メモとは、「始めの書き出しの部分」「展開の部分」「主張やまとめの部分」といった文章の構成の仕方に沿って、書く内容を箇条書きにし、文章の全体像をとらえるものである。個に応じて、進捗状況を確認しながら学習を進めていった。このような指導を行った結果、学級の児童の約90%が自分の主張を書くことができるようになった。

4. 考察

学びに立ち向うすべての子どもたちが、自分の考えをもち、伝え合うことによって、他者と分かち合う喜びや新たな気づきが生まれることを実感できる授業を展開することをめざし、そのための学習指導法の工夫について研究を行った。その結果、以下の3点を明らかにすることができた。

- 1 授業研究を通じた学習指導法の実例10点を分類・整理し、学習指導法を工夫するための観点5点を見出した。
- 2 授業研究を通じた学習指導法の実例10点及び、学習指導法を工夫するための観点5点を構成し、「主体的な学びを育むデザイン枠組み」を見出した。

- 3 学習指導法を工夫した授業を行った結果、研究事例観察対象児童及び学級の児童の約85%以上が、テキストの言葉を根拠に再構成する・解釈する・批評することができるようになった。また、学習したことを活用し、自分の考えをまとめ、発信することができるようになった。

今後さらに、「主体的な学びを育むデザイン枠組み」を生かした授業づくりを様々な教科で行うことによって、学力不振児及びすべての子どもたちが学ぶ喜びを実感することが期待できる。

5. 主要参考文献

秋田喜代美『授業研究と談話分析』 放送大学教育振興会 2007年

秋田喜代美『子どもをはぐくむ授業づくり』 岩波書店 2000年

佐伯 胖 『わかるということの意味』 岩波書店 1995年

鶴田明彦 「教員の授業力意識の変化から若手指導を考える～よりよい授業の意識調査から～」
2010年国立大学法人東京学芸大学教職大学院